



特選

(小学生三四年生)

「ぼくのおばあちゃん」

姫路市立東小学校 四年 井手尾 遼

ぼくが、この世の中に生まれてきたのは、おばあちゃんやおじいちゃんが生まれてきてくれたおかげなのです。大むかしからつづく命をつないで、それをぼくたちが引きついでいるのです。

けれど、おばあちゃんは、きょう年、とつ然のうの病気でたおれてしまいました。大きな手じゅつをして、なんとか命は助かったのですが、残念ながら目を開けることも話をするすることも、体を動かすことも、自分でこきゅうもできないようになってしまいました。

ずっと、ねむったままなのです。おばあちゃんが元気だったころは、よく会いに行ってたくさん遊んでくれたのに、急に変わりはててしまいました。

お父さんもお母さんもぼくたちも、そんなすがたのおばあちゃんの事を思うと悲しくて毎日、なみだが出て止まりませんでした。

でも、おばあちゃんは、がんばって生きてくれています。病院の先生やかんごさんたちが、いつも見守ってくれています。

お見まいに行くと、あいかわらずいつもねむったままのおばあちゃんですが、ふと目をさましてさうでおだやかな顔をしています。のびたかみの手をきれいにカットしてもらった時は、とてもかわいいおばあちゃんでした。

お母さんは、なやみ事があるとおばあちゃんのあたたかい手をにぎりながら、目を見つめて心と心で会話をするのだそうです。なやみを聞いてもらったおかえしに、おばあちゃんの手か足をマッサージしてあげると、気持ちがいいのか、時どき体がヒクッと動くそうです。

まだまだ若いおばあちゃんは、毎日一生けん命生きてくれています。本当はぼくと遊んでほしいけれど、一日でも長くぼくのおばあちゃんのあたたかさを感じてほしいのです。がんばってね、おばあちゃん。

祖母が突然の病気で倒れ、意識不明となる。見舞いに行くと、目を開けることも、体を動かすことも、自分で呼吸をすることもできない、変わり果てた姿。祖母のことを思うと最初は涙が止まらなかった。でも、ふと目を覚ましそうなおだやかな顔。母親は悩みがあると祖母の手を握って心で会話し、その御礼にマッサージをすると祖母の体がびくっと反応するのだそうだ。眠ったままでも長生きしてほしいと、祖母への愛情が子どもらしい表現で描かれている。